

古代中国における蛮族の諸伝説をめぐって

著者	谷口 房男
著者別名	TANIGUCHI Fusao
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	1968
ページ	19-34
発行年	1968
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010264/

古代中国における蛮族の諸伝説をめぐって

谷 口 房 男

目 次

はじめに

一、蛮族の居地

二、蛮族の諸伝説

(A) 槃瓠伝説について

(B) 麋君伝説について

むすび

は じ め に

後漢書^{一六} 南蛮伝には、武陵蛮・巴郡南郡蛮・板楯蛮などをあげ、それぞれの来歴およびその伝説を記している。ところで、西晋末の北方諸族の中原侵入と、漢族の南下とに刺激されて、従来の居地を中心としながらも広い範囲にわたって活動したこれら諸蛮については、不明な点が多く存す

古代中国における蛮族の諸伝説をめぐって

る。同時に研究方法上における問題点もいくつか指摘される。

例えば、武陵蛮の伝説である槃瓠伝説について、(1) 伝説の文化史的追求、(2) 今日の苗族畬族所伝の槃瓠伝説との関係における種族的淵源の追求などを中心とした研究が盛んに行なわれてきた。⁽¹⁾しかし、これらの研究の殆んどが、槃瓠伝説をあくまで武陵蛮という粹にとどめて、

(4) 漢族の南方への進出・発展（漢族が支配民族であるが故にこそ南方への進出・発展として漢文史料にみられるが、支配の拡大に繰り込まれた地域に居住する諸族にとってはまさに侵入・抑圧である）の状況下における土着諸族の一つとして、

(4) この地域における土着諸族間の種族上の変化（移動・結合・分散）、などの側面に対する配慮が欠けている。特に古代中国における蛮族の諸伝説の成立過程とその内容を検討する場合に、蛮族の諸伝説が蛮族自身によって形成され、また彼らの手によって記録され今日に伝えられているのではなく、あくまで漢族の周辺諸族への接触に伴って、その風聞・異聞をもとに漢族の手によって、彼らの伝説が史乘にみえていることを考慮に入れるべきであり、それ故に先の二点の配慮は重要なものであろう。

そこで西晋末より南北朝にかけて、しばしば「槃瓠之後」(槃瓠種)・「麋君之後」(麋君種)として史乘にみえるこれら諸蛮族の動向をもとに、彼らの始祖伝説の形成過程とその種族関係について検討を加えていきたい。なおこうした問題の解明が、先に発表した「宋・齊時代の蛮について」の中で、⁽²⁾不明確となっていたところの種族関係およびその来歴を明らかにする手懸りとなるであろう。さらに南北朝の対立下における蛮族の役割と、漢族の蛮族に対する支配のあり方、即ち懷柔と抑圧という二面政策を通して漢族の南・西南方面への進出・発展を遂げるその過程とともに、蛮族の漢化過程を明らかにする一助ともなるであろう。

一、蛮族の居地

西晋末より南北の対立とかわりながら、盛んに活動したところの蛮族に、⁽³⁾荆・雍州蛮と予州蛮がある。⁽⁴⁾前者は「槃瓠之後」とし、後者を「麋君之後」としている。これら諸蛮族の居地をみるに、諸書によって様々である。いうまでもなく諸蛮族の居地は各時代によって、移動・結合・分散などによる変化があり、その記述に相異があるのは当然である。しかし、諸書を比較してみるに、単に移動・結合・分散によるものばかりではなく、これら諸蛮族の来歴や種族上の変化の不明確などによって、混同を生じたと思われるものも多くある。そこで、こうした混同の一端を示し、その原因を検討してみる。なお記述上における混同としてのみではなく、種族の結合・分散という変化に伴うものが多々存するが、この点は後にみることにする。

ここにみる槃瓠・麋君の伝説を有する諸蛮族の来歴およびその居地について記したものは、成立年代を一応抜きにすれば後漢書が最初といえよう。後漢書は劉宋の范曄撰ということでも明らかなく、南北朝以前に成立した諸書を参照して出来たものである。それ故に、必ずしも後漢時代の状況をつぶさに訳したものととは考えられず、その後に付会されたものも多くみられる。こうした点については、蛮族の始祖伝説を検討する際に改めてふれるとして、ここでは後漢書を中心に他書と比較しながら、後漢時代以降の諸蛮族の居地についてみていく。

後漢書^{卷一六}南蛮伝に、(長沙)武陵蛮は槃瓠の後とし、巴郡南郡蛮は麋君の後とし、また(巴郡)板楯蛮をあげ、その居地と来歴を示している。これら諸蛮族の居地を諸書から摘出したものが表Ⅰ(本文末に付す)である。この表Ⅰは原則として正史の南蛮伝を中心にしたものであり、その他は必ず()内に巻数を付した。なお六朝時代とりわけ北方諸族の中原侵入と晋室の南遷以降における州郡県が、僑州・僑郡県などの改廃・増置に伴って繁雑をきわめ、地理的比較が困難なことは、改めて論ずるまでもなからう。それ故に居地名の配列は州郡別ではない。表Ⅰより、①槃瓠種と麋君種との居地に混同があり、②南北朝時代には「槃瓠之後」・「麋君之後」としてしばしば史乘にあらわれるが、晋代までにみられる板楯蛮については、その後通典を除いて全くあらわれないことの二点が指摘される。この二点についてさらに詳しくみていくこととする。

① 槃瓠種と麋君種の居地の混同。この点について宋書^{卷九}蛮伝に、荆・雍州蠻。槃瓠之後也。分建種落。布在諸郡縣。荊州置南蠻・雍州置寧蠻校尉。以領之。……種類稍多。戸口不可知也。所在多深險。

居武陵者。有谿・櫛谿・辰谿・西谿・舞谿。謂之五谿蠻。而宜都・天門・巴東・建平・江北諸郡蠻所居。皆深山重阻。人跡罕至焉。前世以來。屢爲民患。

豫州蠻。麋君後也。……西陽有巴水・靳水・希水・赤亭水・西歸水。

謂之五水蠻。所在並深阻。種落熾盛。歷世爲盜賊。北接淮・汝。南極江・漢。地方數千里。

とある。ほぼ同時代のこととして魏書^{卷一}蠻伝に、

蠻之種類。蓋盤瓠之後。其來自久。……在江・淮之間。依託險阻。部落滋蔓。布於數州。東連壽春。西通上洛。北接汝・潁。往往有焉。其於魏氏之時。不甚爲患。晉之末。稍以繁昌。漸爲寇暴矣。自劉・石亂後。諸蠻無所忌憚。故其族類。漸得北遷陸渾以南。滿於山谷。宛・洛蕭條。略爲丘墟矣。

とあり、周書・北史の蠻伝もほぼ同様にみえる。この差異は、南北兩朝の対立下における兩朝の支配領域の地理的相異を充分に考慮しつつも、なお混同として考えざるを得ない。特に宋書が蠻族を「槃瓠之後」・「麋君後」として、兩種族の居地を区別しているのに対して、魏書および北朝の諸書が、蠻族を「盤(槃)瓠之後」として、麋君種についてはその居地にふれていない。即ち北朝の諸書蠻伝は、蠻族を「盤瓠之後」として一括しているのである。

なお北朝の諸書に麋君種についてみえないわけではない。例えば、魏書^{卷九}寶李雄伝に、

寶李雄字仲儁。蓋麋君之苗裔也。其先居於巴西宕渠。秦并天下爲黔中郡。薄賦其民。口出錢三十。巴人謂賦爲寶。因爲名焉。後徙犍陽。祖

慕。魏東羌獵將。慕有五子。輔・特・庠・流・驤。晉惠時。關西擾亂。頻歲大饑。特兄弟率流民數萬家。就穀漢中。遂入巴蜀。時晉益州刺史趙廋反叛。特兄弟起兵誅之。晉拜特宣威將軍・長樂鄉侯。流奮威將軍・武陽侯。流民閭式等。推特行鎮北大將軍。承制封拜。流行鎮東將軍。後與晉益州刺史羅尚相攻。昭帝七年。特自稱大將軍・大都督。號年建初。戰敗爲尚所殺。流代統兵事。流字玄通。自號大都督・大將軍。流病將死。以後事屬雄。雄特少子也。雄自稱大都督・大將軍。十年。僭稱成都王。號年建興。置百官。時涪陵人范長生。頗有術數。雄篤信之。勸雄即眞。十二年。僭稱皇帝。號大成。改年晏平。……雄以中原喪亂。乃頻遣使朝貢。與穆帝請分天下。

とある。即ち五胡十六国の一つ李氏の成国は、麋君の苗裔が建国したものであるとする。なお華陽国志^{九卷}李特・雄・期・寿・勢志に、

李特字玄休。略陽臨渭人也。祖世本巴西宕渠寶民。種黨勁勇。俗好鬼巫。漢末張魯居漢中。以鬼道教百姓。寶人敬信。值天下大亂。自巴西之宕渠。移入漢中。魏武定漢中。曾祖父虎。與杜朴・胡約・揚車・李黑等。移於略陽北土。復號曰巴人^{當作}。特父慕。爲東羌獵將。特兄弟五人。長兄輔字玄攻。次特。特弟庠字玄序。庠弟流字玄通。流弟驤字玄龍。皆銳驍有武幹。特長子蕩字仲平。好學有容觀。少子雄字仲儁。とある如く、寶人として「麋君之苗裔」としてはいない。なお晉書^{卷一}李特載記や十六春秋輯補^{卷七}蜀録一は、ともに「麋君之苗裔」としている。

麋君種について、さらに魏書^{卷六}一田益宗伝に、

田益宗。光城蠻也。……蠻世爲四山蠻帥。受制於蕭頤。太和十七年。遣使張超。奉表歸款。十九年。拜員外散騎常侍・都督光城・陽汝南新

蔡宋安五郡諸軍事・冠軍將軍・南司州刺史・光城縣開國伯。食蠻邑一千戶。所統守宰。任其銓置。後以益宗既渡淮北。不可仍爲司州。乃於新蔡立東豫州。以益宗爲刺史。尋改封安昌縣伯。食實邑五百戶。

とある如く、田益宗はもと南朝の齊の蕭頤に制を受けていたが、後に北魏に帰したとする。このことは南齊書^{八卷五}蛮伝に、

西陽蠻田益宗。沈攸之時以功勞得將領。遂爲臨川王。防閑叛投虜。虜以爲東豫州刺史。

とほぼ同様に伝えている。ここに田益宗を西陽蛮・光城蛮とし、さらに彼は東荊州刺史となったとしているが、西陽蛮は宋書^{六卷九}蛮伝にいうところの「麋君後」の居地である。それにもかかわらず魏書の蛮伝には麋君種について記していないのである。

以上の如く、北朝の支領領域内においても麋君種が存在が認められながら蛮伝において、単に蛮族を「盤瓠之後」としているのであるが、これは両朝の蛮族に対する認識の相異——蛮族の漢化程度の差と蛮族の両朝（政權）への役割の違い——によるものではあるまいか。特に西晋末以後の麋君種の居地が槃瓠種の北にあり、その後に移動および徙民^六されとはいえ、南北朝時代においてもこのことに大きな変化はない。さらに南朝の梁・陳における領域の縮小に伴って、麋君種の居地が北朝支配領域となったことを考えるとき、周書^{卷五}蛮伝に、

蠻者。盤瓠之後。族類蕃衍。散居江・淮之間。汝・豫之郡。憑險作梗。世爲寇亂。

としているが、単に「盤瓠之後」のみならず麋君種もいたとすべきである。ともあれ、北朝の諸書蛮伝にみる蛮族は、すべて「盤瓠之後」として一

括されているが、必ずや麋君種も含まれていたとすべきであり、単に種族上の変化に伴う混同のみならず、蛮族に対する認識の相異によって起きた混同も多くみられるのである。例えば、先にみた李特や田益宗などはそのあらわれである。

なお南齊書^{八卷五}蛮族に、

蠻。種類繁多。言語不一。咸依山谷。布荆・湘・雍・郢・司等五州界。

としているは、こうした混同を避けるためではなかったろうか。^七

② 南北朝時代に板楯蛮がみられないこと

この点は次にみる麋君伝説のところでは検討を加えることとして、ここでは麋君伝説をもつ巴郡南郡蛮が、巴郡板楯蛮・賁人・巴氏と同一であるとし、南北朝時代には板楯蛮が史乘にみられなくなった経過をみるにとどめる。^八

前記の呼称が、すべて同一種族の別称かどうかである。まず華陽国志^{一卷}巴志に、

秦昭襄王時。白虎爲害。自秦・蜀・巴・漢患之。秦王乃重募國中有能煞虎者。邑萬家。金帛稱之。於是夷貊忍辱仲藥何射虎。秦精等乃作白竹弩。於高樓上射虎。中頭三節。白虎常從羣虎瞋恚。盡搏煞羣虎。大响而死。秦王嘉之。白虎歷四郡。害千二百人。一朝患除。功莫大焉。欲如約。王嫌其夷人。乃刻石爲盟要。復夷人。頃田不租。十妻不筭。傷人者論。煞人雇死俸錢。盟曰秦犯夷。輸黃龍一雙。夷犯秦。輸清酒一鍾。夷人安之。漢興。亦從高祖。定亂有功。高祖因復之。專以射白虎爲事。戶歲出寶錢。口四十。故世號白虎復夷。一曰板楯蠻。今所謂。

弱頭虎子者也。

漢高帝。滅秦爲漢王。王巴蜀。閬中人范目。有恩信方略。知帝必定天下。說帝爲募發寶民。要與共定秦。秦地既定。封目爲長安建章鄉侯。帝將討關東。寶民皆思歸。帝嘉其功。而難傷其意。遂聽還巴。謂目曰。富貴不歸故鄉。如衣繡夜行耳。徙封閬中慈鄉侯。目固辭。乃封渡沔縣侯。故世謂亡秦范三侯也。目復除民羅・朴・管・鄂・度・夕・龔七姓。不供租賦。

閬中有渝水。寶民多居水左右。天性勁勇。

とあり、また同書同卷に、

順・桓之世。板楯數反。太守蜀郡趙溫。恩信降服。於是宕渠出九穗之禾。胸忍有連理之木。

光和二年。板楯復叛。攻害三蜀・漢中州郡。連年苦之。天子欲大出軍。時征役疲弊。問益州計曹。考以方略。益州計曹掾程包對曰。板楯七姓。以射白虎爲業。立功先漢。本爲義民。復除徭役。但出寶錢。

口歲四十。其人勇敢能戰。昔羌數入漢中。郡縣破壞。不絕若線。後得板楯。來虜彌盡。號爲神兵。羌人畏忌。傳語種輩。勿復南行。後建寧二年。羌復入漢。牧守遑遑。賴板楯破之。若微板楯。則蜀漢之民。爲左衽矣。前車騎將軍憑緄南征。雖授丹陽精兵。亦倚板楯。近益州之亂。朱龜以并涼勁卒。討之無功。太守李顥以板楯平之。忠功如此。本無惡心。長吏鄉亭。更賦至重。僕役過於奴婢。筆楚降於囚虜。至乃嫁妻賣子。或自剗割陳寃。州郡牧守不理。去闕庭遙遠。不能自聞。含怨呼天。叩心窮谷。愁於賦役。困乎刑酷。邑域相聚。以致叛戾。有深謀至計。僭號不軌。但選明能牧守。益其資穀。安便賞募。從其利。自

古代中国における蛮族の諸伝説をめぐって

然安集。不煩征伐也。……如臣愚見。權之遣軍。不如任之州郡。天子從之。遣太守曹謙。宣詔降赦。一朝清戢。

とある。さらに同書同卷の巴東郡の条に、

胸忍縣……咸熙元年。獻靈龜於相府。大姓扶・先・徐氏。漢時有扶・徐。荊州著石。楚訪。有弱頭白虎復夷者也。……郡與楚接。人多勁勇。少文學。有將帥材。

とみえる。少し引用が長くなったのは、板楯蛮・白虎復夷・寶人(民)・巴氏が同一とみなされるようになった過程を示すためであった。ところで、先に引いた華陽國志卷九李特・雄・期・寿・勢志に、

李特字玄休。略陽臨渭人也。祖世本巴西宕渠寶民。種黨勁勇。……

值天下大亂。自巴西之宕渠。移入漢中。魏武定漢中。曾祖父虎。與杜朴・胡約・楊車・李黑等。移於略陽北土。復號曰巴人當作氏。

とみえ、寶民が巴氏と同一種族であるとする。なおこの寶民を魏書卷九李雄伝に、

寶李雄字仲儁。蓋廩君之苗裔也。其先居於巴西宕渠。

としている。即ち寶民が廩君の苗裔であるとして同一種族にしている。

こうした板楯蛮・白虎復夷・弱頭虎子・寶人・巴氏・廩君種を同一種族の別称とする見解は、後漢書卷一六南蛮伝に、巴郡南郡蛮である廩君が死し、その魂魄が化して白虎となり、その白虎をすぐれた武器である白竹の弩(板楯蛮名の由来)を用いて討ったとし、さらにこうした功により徭役が免除され(莫徭の由来)、きわめて軽い租税(寶人の由来)を負担したとするところから生じたのである。こうした来歴より板楯蛮が、廩君種と同一にみなされるようになり、それ故に南北朝時代において、板楯蛮がみ

られなくなったのではなからうか。なお伝説の成立時期とその背景、さらにその内容を検討すれば、もともと廩君種と板楯蛮とが同一種族ではなく、両種の居地が近似し、また両種の種族上の結合・分散を通して次第に同一種族としてみなされるようになったのであろう。こうした種族上の変化がみられる南北朝時代に出来あがった後漢書の蛮伝が、両種の来歴を関連的な伝説としてまとめたのであり、その後成立した諸書が板楯蛮について殆んどふれず、廩君種に一括してしまったのではなからうか。

以上の①・②より、これを総合して考えるに、北方諸族の中原侵入と漢族の南下に伴って、蛮族の一部は、

- (a) 漢族と積極的に接触（漢化）
- (b) 漢族の支配を逃れて大山長谷へ移動（分散）
- (c) 周辺の諸蛮と連合（結合）

するに至り、やがてこうした傾向が一層促進され、彼らの居地の変化のみならず、種族上の変化をもきたしたことが指摘される。⁽¹⁰⁾

二、蛮族の諸伝説

先に蛮族の居地を中心として、その種族上の変化についてふれた。ところで、種族上の変化を具体的に検討する場合に、単に蛮族の居地の移動・分散・結合などをみるに限定するのではなく、文献にみる種族の呼称を系譜的に整理し、さらに風俗・習慣の相異などを比較することが重要であらう。⁽¹¹⁾

ここでは、蛮族の始祖伝説の内容および伝説の成立期とその背景をみることによって、蛮族の種族上の変化について明らかにしていこうと思う。

特に始祖伝説が種族の系譜をみる上に重要な役割を果し得ることはいうまでもないであらう。なお始祖伝説の検討と同時に、風俗・習慣についても重視されなければならないが、この点は史料的制約などにより、殆んどふれることができない。

(A) 槃瓠伝説について

槃瓠伝説については、既に多くの人々によって研究がなされ、その研究動向の一端について先にのべた。ここでは、まず槃瓠伝説の成立期とその背景を漢文史料より検討し、その内容について従来の研究をもとにみていくこととする。

古代において蛮族には記録がないために、彼らの始祖伝説も漢文史料に依らなければならない。それ故に蛮族の始祖伝説の成立期をみる上に大きな難点がある。ともあれ、後漢書^{卷一}南蛮伝に、

(1) 昔高辛氏有大戎之寇。帝患其侵暴。而征伐不剋。乃詔募天下有能得大戎之將吳將軍。購黃金千鎰。邑萬家。又妻以少女。(2) 時帝有畜狗。其毛五采。名曰槃瓠。(3) 下令之後。槃瓠遂銜人頭造闕下。羣臣怪而診之。乃吳將軍首也。(4) 帝大喜。而計槃瓠不可妻之以女。又無封爵之道。議欲有報而未知所宜。女聞之。以爲皇帝下令。不可違信。因請行。帝不得已。乃以女配槃瓠。(5) 槃瓠得女。負而走入南山。止石室中。所處險絕。人跡不至。於是女解去衣裳。爲僕隳之結。著獨力之衣。(6) 帝悲思之。遣使尋求。輒遇風雨震晦。使者不得進。(7) 經三年。生子一十二人。六男六女。槃瓠死後。因自相夫妻。織績木皮。染以草實。好五色。衣服製裁。皆有尾形。(8) 其母後歸。以狀白帝。於是使迎致諸子。衣裳斑蘭。語言侏離。好入山壑。不樂平曠。帝順

其意。賜以名山廣澤。(9) 其後滋蔓。號曰蠻夷。外癡內黠。安土重舊。

(10) 以先父有功。母帝之女。田作賈販。無關梁符傳租稅之賦。(11) 有邑

君長。皆賜印綬。冠用獼皮。名渠帥曰精夫。相呼爲狹徒。(12) 今長沙

武陵蠻是也。

と、槃瓠伝説をのせている。なお後漢書は劉宋・范曄撰であり、それ以前に成立したところの曹魏・魚豢の魏略や晋・干宝の晋紀および搜神記などにも槃瓠伝説がみえる。これらの諸書などをもとにして後漢書の槃瓠伝説はまとめられたのである。

後漢時代に蛮族自身がこのように整然とした始祖伝説をもち、さらに漢族に伝えられていたであろうか。

唐・章懷太子李賢の後漢書注に、范曄撰のこの条のものは、風俗通義に依るものとする。現存の風俗通義には、槃瓠伝説についての記事がみられない。ただ槃瓠を始祖とする伝説を所有する武陵蛮に関して、風俗通義^{四卷}過誉に、

南陽五世公。爲廣漢太守。……會車騎將軍馮緄。南征武陵蠻夷。

とあり、また同書^{九卷}怪神の条に、

世間多有蛇作怪者。

謹按。車騎將軍巴郡馮緄鴻卿。爲議郎。發綬笥。有二赤蛇。可長二尺。分南北走。大用憂怖。許季山孫字寧方。得其先人秘要。緄請使

卜。云。君後三歲。當爲邊將。東北五百里。官以東爲名。復五年。

爲大將軍南征。此吉祥。鴻卿意威名鮮實應且惑。居無幾。拜尚書遼東太守廷尉太常。會武陵蠻夷黃高。攻燒南郡。鴻卿以威名素著。選登亞將。統六師之任。奮虓虎之勢。後爲屯騎校尉。……如寧方之

言。春秋。外蛇與內蛇鬪。文帝時亦復有此。傳志著其云爲。而鴻卿獨以終吉。所謂或得神以昌乎。

とあるが、現存の風俗通義からは槃瓠伝説についてみることができない。ともあれ後漢末に成立した応劭撰の風俗通義に、武陵蠻夷についてみえ、後漢書の李賢注に風俗通義に槃瓠伝説がみえるとするから、少なくとも後漢末には、この伝説の原形があったといえよう。

後漢書の槃瓠伝説には、種々な矛盾を含んでいる。その一端は唐・劉知幾の史通^{八卷}書事二九に、

范曄博採衆書。裁成漢典。觀其所取。頗有奇工。至於方術篇。及諸蠻夷傳。乃錄王喬・左慈。廩君・槃瓠。言唯迂誕。事多詭越。可謂美玉之瑕。白圭之玷。惜哉。無是可也。

とのべている。また唐・杜佑の通典^{八七卷}一辺防典三南蠻上に、槃瓠伝説をあげその注に、

按范曄後漢史蠻夷傳。皆怪誕不經。大抵諸家所序四夷。亦多此類。未詳其本出。且因而商略之。曄云。高辛氏募能得犬戎之將軍頭者。購黃金千鎰。邑萬家。妻以少女。按黃金。周以前爲斤。秦以二十兩爲鎰。三代以前分土。自秦漢分人。又周末始有將軍之官。其吳姓宜自周命氏。曄皆以爲高辛之代。何不詳之甚。

としている。しかし史書に対する両者の指摘が當を得たものであるとはいえず、蛮族の始祖伝説の形成とその内容をみる上には、このような矛盾こそ、一つの手懸となる。即ち始祖伝説であるが故に、漢族の伝説上の高辛氏に結びつけて両者の関係の古さを示そうとしているが、内容上における時代の矛盾は、伝説の形成期を反映したものであろう。

さて槃瓠伝説の内容についていく場合に、①南蛮の一種族である武陵蛮がどのように大祖（槃瓠犬）伝説と結びつくか、また②武陵蛮と漢族との関係はどのようなものであったか、ということ明らかにしなければならぬ。特に①の武陵蛮と大祖伝説との結びつきが、従来における槃瓠伝説の研究の中心となっていた。例えば、(1)楊寛氏は「盤古槃瓠與大戎犬封」において、大戎が槃瓠の後であるとし、(2)松本信広氏は「槃瓠伝説の一資料」の中で、大をトーテムとする大祖崇拜の一面と結びつけ、また(3)槃瓠が水と深い関係にあるところから、洪水伝説に結びつけられている。これらはみな南蛮の蛇種が、なに故に犬種と結びつき、犬種伝説が成立したかを示そうとしたものである。

先ず(4)の大戎が槃瓠の後であるとする楊寛氏の説であるが、森三樹三郎氏は「支那古代神話」の盤古槃瓠の条で、

北狄なり南蠻なりの名稱や文字は、漢民族が勝手に附したものであつて、その部族本来の性質に關係がない。大戎といつても、その部族が必ずしも犬をトーテムとしてゐたわけではなく、たまたま名犬の産地に近かつたために附せられた名稱であるかも知れない。反對に南蠻のうちに犬をトーテムとする部族があつたとしても、決して不合理ではない。

として、この説に反対し、さらに楊寛氏などは八卷本の搜神記に、

昔高辛氏時。有房王作亂。憂國危亡。……辛帝有犬。字曰盤瓠。其毛五色。常隨帝出入。……其後子孫昌益。號爲犬戎之國。周幽王爲犬戎所殺。只今土蕃。乃盤瓠之孕也。

とみえるのをその有力な根拠としているのであるが、むしろ二十卷本の搜

神記に依るべきとして、盤瓠犬戎説を斥けられた。ところで森氏の説に基本的には賛成であるが、しかし犬戎と無関係であるとするには、若干の相異がある。即ち松本信広氏が「蛮夷名義考」において、三国志^{卷三}に魏略西戎伝を引き、

氏人有王所從來久矣。自漢開益州置武都郡。排其種人。分竄山谷間。或在祿福。或在汧隴左右。其種非一。稱槃瓠之後。或號青氏。或號白氏。或處野氏。此蓋蟲之類。而處中國。人即其服色。而名之也。

とあるのをあげ、「氏を槃瓠種となすことが了解されぬ譯でもない。氏は……羌と同一視せられ、普通チベット種と解せられておるものである」と不明確な表現ではあるが、兩種の関連についてのべられている。⁽¹⁵⁾これは先のべた如く、巴郡板楯蛮が巴氏と同一種族にみなされるようになったこと、また槃瓠が犬戎を討ったとする内容などを結びつけて考えるとき、全く犬戎と無関係であったとはいえないであろう。即ち兩種族の間になんらかの関係があったということであるが、この点は次の麋君伝説のところ、改めてふれることとする。

次に(5)大祖崇拜と(6)槃瓠犬が水と深い関係にあるところから洪水伝説に結びつけた説であるが、(5)については再述をさけ(6)についてみる。

松本信広氏は「槃瓠伝説の一資料」において、伝説の中に多く雨と関連した記事がみえ、「山澤が水の本源であるとするればその支配者たりし槃瓠の子孫が水の呪術師と目せられておることは不思議でなく、かつその祖先が犬の形で考えられることも納得出来る」とし、さらに「蛮(獠)と非常に人種として近似しておる苗族に於ても之に似た伝説があり」とのべられている。⁽¹⁷⁾この説は、山本達郎氏が「マン族の山関簿」の中で、パリ亜細

亜協会所蔵マン族の山関簿を詳細に検討された結論として、「古傳説に關しては、マン族個有の槃瓠説話に於て畚民の所傳との特別の關係を考へ、洪水説話に關しては寧ろ之を後に附加された要素であると考へた」とされている。⁽¹⁸⁾ また白鳥芳郎氏は「西南シナ少数民族の一考察」の中で、山本

氏の説をふまえて、「苗族と称される民族の母体は獠（マン）であると考えるので、苗族の母体中に獠の槃瓠伝説が存するのは寧ろ当然である。しかし所謂広義の苗族の中に洪水神話が存在してゐるのはこの広義の苗族の中に獠とは別に他族の文化要素が存在してゐるのではないかと云ふことが考へられて来る」とのべ、⁽¹⁹⁾ さらに「……從來苗族自体の神話として扱は

れてゐた洪水神話は、獠族がタイ族から受け入れた神話であると云ひ得ると同時に、また苗と云ふ名称を奉じて獠族社会の中に編入されてゐたタイ族集団それ自体が、保持してゐた神話であると云ふことも出来るであらう。そしてこの所謂苗族の母体たる獠族の槃瓠伝説は、更にその系統を越族の槃瓠伝説にまで発展し得るものと考へられるのである」とのべられて⁽²⁰⁾ いる。これらの諸説は、古代の文献にみる槃瓠伝説への検討のみならず、

後ちにマン族自身が記録し伝えたとする「評皇券牒」や「山関簿」をもとに今日槃瓠伝説を伝えているところのいくつかの少数民族の相互關係の検討の上に結論されたものである。ここでは、今日の苗・獠・畚族間の種族關係については省略する。ただ松本氏は武陵蛮がもつところの槃瓠伝説の中に洪水伝説の要素があり、それ故に南方の蛇種に犬種の伝説が成立すると結論されたのであるが、単に武陵蛮の中に求めるのではなく、原形はともかくとして、後漢書にみるような整然とした槃瓠伝説の成立期にはすでに他種族との結合關係がみい出されるのではあるまいか。例えば、次に

古代中国における蛮族の諸伝説をめぐって

みる虞君伝説には槃瓠伝説以上に水との関連がみえるが、この点について徐松石氏は、「以前史を讀み能く浮ぶを虞君と稱するを覺知したが、未だ何の義かを知らなかつたが、近年僮人が水を虞と呼ぶのを見て以前の疑問は渙然として永釋した。」とのべているごとく、⁽²¹⁾ 早くから兩種の間に關係があつたことをみる。くりかえしのべてきたが、ここにも武陵蛮に種族上の変化が認められよう。

さて②槃瓠伝説の中に蛮族と漢族との關係が多くみられる点である。

それは(イ)槃瓠と盤古の關係であり、また(ロ)高辛氏・犬戎・槃瓠の關係である。

(イ)の槃瓠と盤古の關係について、楊寬氏は南蛮より起つた槃瓠伝説の同音異字であり、のちに槃瓠伝説が南蛮の始祖伝説として、盤古伝説は宇宙創生の伝説として漢族の間に伝えられたとする。⁽²²⁾ これに反し、森三樹三郎氏は、ともに南蛮の伝説であるが、その内容には相違があり、「南北朝時代の南蠻部族の間には、この二つの傳説が並んで行はれてゐたと見るべきであらう。」とし、⁽²³⁾ さらに「現在の苗・獠の諸部族では槃瓠傳説は存在するけれども、盤古神話の方は全く失はれてゐるやうである。これは槃瓠傳説の方が物語的な構成に於いて優れて居り、かつは南蠻部族の漢民族に對する關係を説明するのに好都合である、といふやうな事情が然らしめたものと思はれる」とする。⁽²⁴⁾ 特に森氏も指摘されているが、槃瓠伝説の原形はともかくとして、形成確立した時期を南北朝時代におくとき、先の漢民族に對する關係を説明するに好都合とする点には賛成である。これと関連し、(ロ)高辛氏・犬戎・槃瓠の關係についてであるが、「先父之功」として犬戎の寇を槃瓠が討ったとか、「母帝之女」として槃瓠の妻が高辛氏（漢

族)の女であることに、「田^田作買販。無關梁符傳租税之賦。」として、漢族が蛮族に特権を与えているようにみえる。

この点は、武陵蛮のみならず、その他南蛮の諸族とも関連するが、伝説の形成過程において、漢族と南蛮諸族とが対等な立場におかれていたであろうか。この措置は、あくまで漢族の側からの一方的なものではあるまいか。この伝説が原形はともかくとして、漢族を中心に組み立てられたものであり、蛮族は漢族の支配地域の拡大によって認識され、先進文化を有する漢族が、おくれた文化を有する蛮族として蔑視し、即ち対等の関係においてではなく、むしろ上・下関係として差別を明確に意図したものである。このことは、漢族の支配地域の拡大に伴って、その支配下に繰込まれた諸蛮が、その支配の苛酷さに対してしばしば反抗しているのであり、また、かかる反抗が反乱・寇暴として史乘にあらわれ、さらには反抗した蛮族を賊とみなしていること⁽²⁶⁾によっても明らかであろう。これらはあくまで支配する側としての漢族を中心としたみかたではあるまいか。このように考えれば、蛮族への優遇措置は、あくまでも漢族の開発・進出地域への支配を貫徹する一環としての懷柔・抑圧という二面的な政策のあらわれであって、単に両族の対等の上に成りたったものではない。⁽²⁷⁾

以上の如く、槃瓠伝説の形成期の背景とその内容についてみてきたが、後漢書にみる槃瓠伝説は、後漢時代にすでにこのように整然とした伝説として蛮族の間に伝えられていたものではなく、南北朝時代に蛮族の風聞・奇聞をもとに漢族によって完成されたものである。

(B) 麋君伝説について

従来槃瓠伝説の研究が盛んに行なわれているのに反して、後漢書南蛮伝

をはじめ六朝時代の諸書に麋君・板楯の兩種の来歴を含めた伝説が散見するにもかかわらず、殆んど顧みられていない。なに故に兩種の伝説が顧みられなかったであろうか。以下に検討を加えるとして、まず少くとも次の点が指摘されよう。

① 麋君・板楯の兩種は早くから接触して種族上の変化をきたし、また漢族との接触も早くから行なわれ、それ故に槃瓠伝説にみられるような風聞・奇聞による物語的(伝説的)要素が比較的に少ない。

② 麋君・板楯の兩種族は六朝時代に盛んに活動し、大勢力を有していたが、漢族の南下と漢族への投帰により、その後は殆んど史乘にあらわれなくなった。即ち、兩種の多くが漢化し、また他種族と結合した。さらにその一部は大山長谷に逃れ、漢族との接触が少なくなったと同時に、彼らは別称されるようになったのである。それ故に、兩種の伝説が漢族に顧みられなくなったし、また彼ら自身も殆んど伝えなくなった。

このような事情は、槃瓠伝説と大きく相異するところである。

まず麋君伝説についてみるに、後漢書^{卷一}南蛮伝に、

(1) 巴郡南郡蠻。本有五姓。巴氏・樊氏・暉氏・相氏・鄭氏。皆出於武落鍾離山。其山有赤黑二穴。巴氏之子生於赤穴。四姓之子皆生黑穴。(2) 未有君長。俱事鬼神。乃共擲劍於石穴。約能中者。奉以爲君。巴氏子務相乃獨中之。衆皆歎。又令各乘土船。約能浮者。當以爲君。餘姓悉沈。唯務相獨浮。因共立之。是爲麋君。(3) 乃乘土船。從夷水至鹽陽。鹽水有神女謂麋君曰。此地廣大。魚鹽所出。願留共居。麋君不許。鹽神暮輒來取宿。旦即化爲蟲。與諸蟲羣飛。掩蔽日光。天地晦

冥。積十餘日。麋君思其便。因射殺之。天乃開明。麋君於是君乎夷城。四姓皆臣之。(4) 麋君死。魂魄世爲白虎。巴氏以虎飲人血。遂以人祠焉。

とあり、水經注・荊州記・晉書・通典・蠻書などに殆んど同様なことを伝えてゐる。これらの諸書はみな南北朝から唐にかけて成立したものである。それ故にこの伝説の原形は早くからあったとしても、このような形にまとめられたのは、南北朝時代においてであらう。

さて、この伝説には二つの要素を結合させてまとめたものと思われる。

その一は、後漢書の麋君伝説の(1) (3)、麋君の由来を説明している部分である。特に麋君が水と関係の深いことは、その伝説内容からも窺われるが、また水經注^{卷三} 江水の条に、

又東出江關。入南郡界。

江水自關東逕弱關捍關。捍關。麋君浮夷水所置也。

とあり、さらに同書^{卷三} 夷水の条に、

夷水出巴郡魚復縣江。

夷水。卽假山清江也。水色清照十丈。分沙石。蜀人具其澄清。因名

清江也。昔麋君浮土舟於夷水。據捍關而王巴。……

東南過假山縣南。

夷水自沙渠縣入。水流淺狹。裁得通船。東逕難留城南。城卽山也。

獨立峻絕。西面上里餘。得石穴。把火行百許步。得二大石磧。並立

穴中。相去一丈。俗名陰陽石。陰石常溼。陽石常燥。每水旱不調。

居民作威儀服飾。往入穴中。旱則鞭陰石。應時雨。多雨則鞭陽石。

俄而天晴。相承所說。往往有効。但捉鞭者不壽。人頗惡之。故不爲

古代中国における蛮族の諸伝説をめぐって

也。東北面又有石室。可容數百人。每亂民入室避賊。無可攻理。因名難留城也。

とし、これに続けて後漢書にみると同様な麋君伝説をあげている如く、水と深い関係があることを知る。なお先に引いたが麋君が塩陽に至った時、

鹽水有神女。謂麋君曰。此地廣大。魚鹽所出。願留共居。麋君不許。

鹽神暮輒來宿取。旦卽化爲蟲。與諸蟲羣飛。掩蔽日光。天地晦冥。積

十餘日。麋君思其便。因射殺之。

としている。これは他種族との関係を説明するものとして、即ち塩陽にいた一種族を征服して自からの居地としたということを説明するところの物語的要求として、麋君伝説に付加したものではなからうか。

その二は、後漢書の麋君伝説の(4)、麋君が死にその魂魄が化して白虎となったとする部分である。ここで麋君と白虎とがどのような関係にあるかを明らかにし難いが、章冠英氏は、麋君蛮の後裔である湘の西北・鄂の西南一帯の土家人が「虎」を「力」と呼び（嚴如煜「苗疆風俗考」にみる）、麋と力とは音が近いから、麋君の死後世に白虎としているは、麋君があるいは「虎君」の意味ではなからうかと推測している。⁽²⁸⁾この推測の可否はともかくとして、華陽国志^{卷一} 巴志に「故世號白虎復夷。一曰板楯蠻。今所謂弭頭虎子者也。」としているように、麋君種と板楯蛮との関連において白虎をみていきたい。

板楯蛮について後漢書^{卷一} 南蛮伝に、

(1) 板楯蠻夷者。秦昭襄王時。有一白虎。常從羣虎。數遊秦・蜀・巴・漢之境。傷害千餘人。(2) 昭王乃重募國中有能殺虎者。賞邑萬家。金百鎰。(3) 時有巴郡閬中夷人。能作白竹之弩。乃登樓射殺白虎。(4) 昭

王嘉之。而以其夷人不欲加封。乃刻石盟。要復夷人。頃田不租。十妻不算。傷人者論。殺人者得以倭錢贖死。盟曰。秦犯夷。輸黃龍一雙。

夷犯秦。輸清酒一鍾。夷人安之。

とある。この板楯蛮の記事は他の二伝説に比較して風聞・奇異が少なく、物語的（伝說的）要素に欠ける。ともあれ板楯蛮の由来を説明するに、板楯蛮が白虎復夷であるとし、また「專以射白虎爲事」とあるところから、白竹の弩で白虎を討ったとし、その白虎は麋君が死にその魂魄が化して生じたとするのである。

以上の点から、後漢書にみる麋君伝説は、(i) 風俗通義・華陽国志・魏略・晋紀・搜神記などにみる如く、南北朝以前から知られていたところの板楯・槃瓠の由来・伝説をもとにして、(ii) 盛弘之の荊州記や水経注などにみる如く、この地域の水に関する風聞をとりいれ、(iii) 後漢書の成立した時期の背景——諸蛮族間の接触の状態と漢族のこれらに対する認識と深く結びついて、(iv) 特に南北朝時代に槃瓠種とともに盛んに活動したところの麋君種の伝説としてまとめられたものと思われる。

む す び

西晋末における北方諸族の中原侵入によって、漢族は南下し、それに刺激され盛んに活動した諸蛮族（槃瓠種・麋君種を中心として）について、特に伝説の成立期とその背景およびその内容を漢族との接触と蛮族間の移動・結合・分散による種族上の変化などを通してみてきた。

なおこれら槃瓠・麋君の兩種を蛮族の種族名として一括してきたが、史乘に「蠻。種類繁多」とか、⁽³⁰⁾「南蠻雜類」として⁽³¹⁾いる如く、蛮族の種族構成はきわめて複雑である。例えば、華陽国志^{卷八}巴志に、

其屬有濮賈・苴共・奴獯・夷蠻之蠻。

と、巴郡に諸種の蛮族がいたことをのべている。また隋書^{卷八}南蛮伝に、南蠻雜類。與華人錯居。曰蜒。曰獯。曰俚。曰獠。曰龜。俱無君長。

隨山洞而居。古先所謂百越是也。

とある。これらの呼称は時代・地域などの相異により、① 同種異名、② 異種同名、③ 異種異名の呼称によって表現され、一括して南蛮と称しながらもきわめて複雑な関係にある。これらの追求は、風俗・習慣や生業形態の比較を通じて、南蛮諸族の漢化過程とその移動・結合・分散による種族上の変化などを明らかにしていくことによってなされるであろう。なおこのような追求は、特に中国の南・西南地域の小數民族の歴史を研究する上に重要であるが、ここでは殆んどふれることができなかった。

[illegible]

大林太良氏「ミヤオ族・ヤオ族の民族形成論の若干の問題」(中国大陸古文
化研究第四集)

竹村卓二氏「族譜を通して見た畚民（獐族）の社会状況」（人文学報 64）

白鳥芳郎氏「西南シナ少数民族の一考察」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』)

所収)

森三樹三郎氏著「支那古代神話」一九四四年 大雅堂

などがある。

(2) 白山史学第一四号

(3) 章冠英氏「兩晉南北朝時期民族大變動中の麋君蠻」(歴史研究一九五七年第二期)

周一良氏「南朝境内之各種人及政府對待之政策」(国立中央研究院歴史語言研究所集刊第七本四分。のち「魏晉南北朝史論集」所収)

金宝祥氏「漢末至南方蠻夷的遷徙」(禹貢半月刊第五卷第一期)

(4) 宋書^{卷九} 蛮伝

なお地名等を付しているものは、原則としてその地域に居住する蛮を指すのであって、種族名をあらわすものではない。即ち蛮の部落名ともいふべきものであり、あくまで漢族中心にみたものである。

(5) 南北両朝の対立に結びついて、その軍事的・政治的役割として両朝政權は諸蛮族を盛んに移住させている。

なお周一良氏「北朝的民族問題與民族政策」(燕京學報第三九期。のち「魏晉南北朝史論集」所収)および章冠英・金宝祥氏の前記論文などを参照。

(6) 註(3)を参照。

(7) 通典^{卷八十七} 边防三南蛮の条に板楯蛮について記し、その末注に、

按後漢史。其在黔中五溪長沙間。則爲盤瓠之後。其在硤中巴梁間。則麋君之後。其後種落繁盛。侵擾州郡。或移徙交雜。亦不可得詳別焉。とある。

(8) 章冠英氏の前記論文。なお蠻族もこれらと同一種族とするものに、

何格恩氏「蠻族の來源質疑」(嶺南學報第五卷第一期)

羅香林氏「唐代蠻族考」上編(文史學研究所月刊第二卷第三・四期合刊)

陳序經氏著「蛋民的研究」商務印書館刊

などがある。また唐長孺氏「范長生与巴氏据蜀的關係」(歴史研究一九五四年第四期。のち「魏晉南北朝史論叢」続編所収)を参照。

(9) 隋書^{卷三} 地理志下に、

長沙郡又雜有夷獯。名曰莫徭。自云。其祖先有功。常免徭役。故以爲名。とみえる。

(10) 隋書^{卷三} 地理志下に、

南郡・夷陵・竟陵・沔陽・沅陽・清江・襄陽・春陵・漢東・安陸・永安
古代中国における蛮族の諸伝説をめぐって

・義陽・九江・江夏諸郡多雜蠻左。其與夏人雜居者。則與諸華不別。其僻處山谷者。則言語不通。嗜好居處金。異。頗與巴渝同俗。諸蠻本其所出承盤瓠之後。故服章多以班布爲飾。其相呼以蠻。則爲深忌。

とあり、諸蛮族が雜居していることと同時にその風俗の相異や漢化の差異をのべている。ここに蛮が「盤瓠之後」とするは、魏書・周書と同様である。特に右記の地域は槃瓠種のみならず麋君種の居地であったが、槃瓠種に一括しているのである。

(11) 白鳥芳郎氏「華南土著住民の種族Ⅱ民族分類とその史的背景」(上智史学 No. 12)。同氏「民族系譜から見た華南史の構成試論」(金関丈夫博士古稀記念委員会編「日本民族と南方文化」所収)

なお個別的なものとして、列えば蠻族について、

桑田六郎氏「蠻族の源流に関する文献的考察」(南亞細亞學報第二号)

および註(8)の何格恩・羅香林・陳序經氏の前記論文・著書などがある。

(12) 「古史辨」第七冊。

(13) 「東亞民族文化論攷」所収。なお同氏「槃瓠伝説に就て」(東京人類学会 聯合大会第四回記事)を参照。

(14) 「支那古代神話」一三三頁。

(15) 「東亞民族文化論攷」五九三頁。

(16) 同右書二二七頁。

(17) 同右書二二九頁。

(18) 東洋文化研究所紀要第七冊。

(19) 「和田博士古稀記念東洋史論叢」五三四頁。

(20) 同右書五三四・五三五頁。

(21) 徐松石著・井出氣和太訳「南支那民族史」二六五・二六六頁。

(22) 註(12)参照。

(23) 「支那古代神話」一二九頁。

(24) 同右書同頁。

(25) 拙稿「宋・齊時代の蛮について」(白山史学第一四号)

(26) 後漢書^{卷一六} 南蛮伝に、

(肅宗建初)三年冬。澧中蠻覃兒健等復反。攻燒零陽・作唐・屏陵界中。明年春。……擊澧中賊。

(安帝元初二年)……明年秋。濃中・濃中蠻四千人。並爲盜賊。

永壽三年十一月。長沙蠻反叛。屯益陽。至延熹三年秋。……(冬)於是

以右校令度尙爲荊州刺史。討長沙賊平之。

とあり、また晋書^{卷九}孝文帝紀

寧康二年冬十一月己酉。天門蠻賊攻郡太守王匪死之。

とあるなお後 漢書^{卷一六}南蠻伝の板楯蛮の条に、

板楯七姓。射殺白虎立功。先世復爲義人。其人勇猛。善於兵戰。……忠

功如此。本無惡心。長吏鄉亭。更賦至重。僕役筆楚。過於奴虜。亦有嫁

妻賣子。或乃至自頸割。雖陳寃州郡。而牧守不爲通理。闕庭悠遠。不能

自聞。含怨呼天。叩心窮谷。愁苦賦役。困罹酷刑。故邑落相聚。以致叛

戾。非謀主僭號。以圖不軌。今但選明能牧守。自然安集。不煩征伐也。

と、漢族の蛮族支配の苛酷さによって、蛮族が反乱をおこしているのである。

(27) 竹村卓二氏の前記論文で、社会的共生について指摘されている。

(28) 章冠英氏の前記論文の注(2)。

(29) 南宋・洪适の隸統^{卷一}繁長張禪等題名に、

白虎夷王謝節 白虎夷王資偉

とみえる。その解説に、

右蜀郡繁長等題名。一石三橫。今在蜀道。首行云。長蜀郡繁長君。諱禪

字仲聞。其次題掾曹十人。及三民姓名。次橫之首行云。夷淺口例掾趙陵

字進德。次夷侯九人。邑長三人。夷三行。邑君三人。夷民六人。後云。

凡世八戶造。木有四行。高出兩字。題白虎夷王。及丞尉名字。最後兩

行。及其下一橫。字畫差小。似是紀事之辭。惟夷王謝資數字不明。餘皆

不可讀。東都益部郡縣。夷漢錯居。此必郡太守有德政。繁縣夷人共立此

碑。尊其官吏。故書之前列。范史西南夷傳。安帝時青衣道夷。邑長令

田。舉土內屬。帝增令田爵號。奉通邑君。則邑君邑長皆夷猶之稱也。史

載。蜀郡徼外。有白馬國。作都之西。有白狼國。無所謂白虎國者。秦時

有白虎爲巴蜀之害。募能殺之者。賞邑萬家。閬中夷人登樓射殺之。即校

楯蠻之先也。又赤穴巴氏子。乘土船能浮。衆共立之爲廩君。既死魂魄世

爲白虎。所謂白虎王者。豈此二國之別稱乎。

としている。この碑は漢代のものと思われるが、洪适は白虎王を廩君種、板

楯蛮の別称であろうとする。なお宋代に黔中郡に居住する諸種として、太平

寰宇記^{卷一}黔中の条に、

控臨番落種

牂柯 昆明 柯蠻 桂州 提拖 蠻蠻 葛獠 没夷 巴 尙抽 勃

新柯 俚人 莫徭 白虎

をあげ、その一つとして白虎がみえている。

(30) 南齊書^{卷五}南蠻伝。

(31) 隋書^{卷八}南蠻伝。